位ではいかぬ、肉食しなければ身体はいけないやうに思ひます。私はまだ研究しないが、長与さんに頼んで食料と体力と労働との分量を量って呉れと頼み又後藤さんにも職工衛生のことに就いて聞きました。

ここに出てくる長与・後藤は、ともに内務省衛生局長の任にあたった長与専斉と後藤新平である。この講演によれば、佐久間が実行した八時間労働は、十時間かかるものを八時間で仕上げるという能率増進の方法を加味したもので、ロバート・オーエンが一八一六年に提唱した八時間労働制そのものではなかったと判断したい。秀英舎の工場規則（昭和三十九年現在）によれば、夜業手当は一時間ごとに日給の九分の一、午前零時から三時までの間はさらに五割増、徹夜勤務は日給の八割三分と規定されている。なお勤務時間は実働九時間、休憩・食事各三十分である。

（京都工場保健会）

初期の植民地医療における現役軍医の役割——殊に台湾、韓国において——

佐久間温巳

一、はじめに

昨年の第八十四回総会で、明治二十年前後に複数の現役軍医が全国各地で、軍人でない一般人を診療の対象として設立した病院について述べた。今回は、日本の植民地となった日清戦役後の台湾、日露戦役後の韓国（後の朝鮮）で、初期の衛生・医療面に関与した現役軍医の役割について報告する。

二、台湾において

明治二十八年四月、日清講和条約が締結され、台湾、澎湖島は日本に帰属した。同年六月、初代台湾総督樺山資紀海軍大将は、台北で総督府始政式を挙行した。その当時、衛生医療方面で現役軍医が関与した事項を列記する。

(イ)、明治二十八年六月十六日、総督の諮詢機関として衛生委員会（長・陸軍少将大嶋久直）が組織され、陸軍軍医よ

り森林太郎軍医監、木村達軍医監、山田秀治一等軍医、海軍軍医から鶴田鹿吉軍医少監、高平了輔大軍医が参加し、意見を述べた。

(ロ)、同年七月二日、森軍医監は総督府官房衛生事務総長に就任し、医務を統轄した。まもなくこの職は廃止され、総督府陸軍局軍医部長となった。

(ハ)、当時台湾進攻中の近衛、第二両師団の兵站病院では、内地人や現地人の診療が行われていた。このことは基隆兵站病院での日赤救護班の記録に明らかである。

(ニ)、その頃、台北に大日本台湾病院、総督府診療所という二つの医療機関が置かれ、後者では、山田一等軍医や海軍局軍医官が診療を担当した。

(ホ)、明治二十九年開設された台北医院（後の台北帝大附属病院）へは、堀内次雄三等軍医が派遣され、以後五十年間にわたって台湾医学の発展に尽力したことはよく知られている。また、藤田嗣章一等軍医正が陸軍局軍医部長になってからは、台北仁戌病院附の優秀な軍医を台北医院に派遣し、積極的な援助を行った。これに参加した軍医は、山口弘夫、肥田七郎、河西健次、西郷吉弥、山田弘倫らであった。

三、韓国（朝鮮）において

日露戦役後、明治三十八年十一月、第二次日韓協約が調印され、日本は韓国に統監を置くことになった。初代統監に伊藤博文が就任し、翌三十九年二月一日、京城に統監府が開庁した。韓国における初期の医療、衛生面で軍医が関与したのは大韓医院と慈恵医院であった。

(イ)、京城に大病院を建設することになり、創立委員長に佐藤進軍医総監が就任した。既存の広済院、官立医学校、大韓赤十字病院を基礎に、明治四十一年四月大韓医院が開院し診療は主として軍医が担当した。第二代院長は菊地常三郎軍医総監、第三代は駐剳軍軍医部長藤田嗣章軍医監の兼任と陸軍軍医が続いた。なお、大韓医院は、明治四十三年八月二十九日の韓国併合後、朝鮮総督府医院と改称された。

(ロ)、医療に恵まれない地方の人達の慈恵救療機関として、明治四十二年八月、日露戦役であまった衛生材料を利用し、朝鮮全道に各々一ケ所の慈恵医院設立の案が現地軍医部内で起こり、直ちに実行された。これには朝鮮総督医

院長藤田軍医監の努力があった。明治四十二年十二月、まず全羅北道の全州と忠清北道の清州に建設され、四十三年九月までに全道で開院した。慈恵医院の診療は、現役の陸軍軍医が担当し、他に陸軍の看護長らも参加し、当初は野戦病院の様相を呈したといわれている。次第に整備され、大正六年頃から陸軍の手を離れ、やがて道立病院に発展した。ちなみに、明治四十三年九月五日に開院した京畿道慈恵医院（水原）の職員は、院長が村井静夫三等軍医正、医員に吉野麟至二等軍医、庶務が岩田恒四郎上等看護長、他に薬剤手の雇員、看護婦一名、助手として現地人（いわゆる医生か）二名の構成であった。台湾と違って、朝鮮では、中央医院を始め、各道の病院はすべて現役軍医によって診療が行われたのである。

四、まとめ

植民地統治の要諦は人心の把握にあり、その捷径は、生命の安全と健康の増進を得させる医療衛生の充実にあるといわれている。日本の植民地統治でもこの原則は守られ、殊に医療の遅れた台湾、韓国でこの方面に努力が払われ、その大きな役割を現役軍医達が果たしたのである。

〔主要参考文献〕

一、陸軍軍医中将藤田嗣章
一、鷗外全集第三十三巻
一、侯爵伊藤博文伝
一、三木栄　京畿道立水原医院二十五年史　中外医事新報　昭和十一年　他